

## 「古代の高森の姿～伊那郡衙成立前後の様相を中心にして～」

高森町歴史民俗資料館主事 芦部 公一

## 1 はじめに

## ○資料館考古部門展示リニューアルとその必要性

ただいまご紹介いただきました芦部です。この資料館に勤めまして4年目に入りました。

先程、館長からはなしがありましたとおり、この6月から1ヶ月間かけて2階の考古部門の展示替えを行いました。開館から30数年間経ちましたが、その間、この高森町では沢山の発掘調査が行われてきました。そして沢山の成果、出土品が蓄積されてきています。それを是非多くの町民の皆さんに見て頂きたいと考えており、これをどう展示公開していくかが大きな課題でした。今回少しですがその一歩が踏み出せたかと思っています。

もう一つ、展示替えをした理由は、「小学校・中学校の子供さんは高森の資料を見て、日本の歴史を高森の資料から学ぶ事が出来るのではないか」という思いが強くなりました。

大事な考古資料が並んでいますが、そのひとつひとつの説明というよりも、そういうものを通してその裏にある歴史とか、人々の生活とかそういうものがうかがい知れる、そんな資料館が出来るの良いと常々館長と話していたのですが、それが出来たかどうか、是非後ほど見ていただいご意見をいただければと思っています。

もう一つはここ最近の事です、隣の座光寺地区を見ていただければわかりますが、『恒川遺跡』が国の史跡に指定されました。

古代の伊那郡の役所があった、郡衙があった場所だということで大変有意義なものであるということで史跡に指定されました。それから『飯田古墳群』がこれも史跡に指定されました。日本史を語る上で飯田古墳群を抜いては語ることのできない事実があるのです。この高森地区はその座光寺地区の隣ということで大変大きな関わり合いがあるはずで

す。そんなこともこの展示の中で表現できればという事で今回の展示替えになったわけです。

運営委員の皆様にも大変御協力いただき、また、関係の方々にもご指導いただいたわけですが、力不足で良いものになったかどうか自信がありません。どうぞよろしく願いいたします。それでは早速本題に入ります。

最初に展示替えに関わってこんなところが高森町の遺跡です、そこからこんなことがいえますよということがまずひとつ。それからそれを通して今日のメインテーマであります伊那郡衙成立前後の高森町との関わりについておはなしをしたいと思います。

## 2 主要遺跡の概要と高森の歴史

## ○ 旧石器縄文時代から中世松岡氏までの高森の歴史（展示に触れて）

それでは最初に展示にかかわってですが、今ご覧いただいているのは伊那谷最古の石器群で山本竹佐の中原遺跡というところ。およそ3万年前といわれていますが、三遠南信道路の山本インター工事のところで発見されました。考古学の世界ではこの直前に旧石器捏造事件というのがありまして、日本中を大騒がせた後でした。50万年前という途方もない年代が示された後でしたので、本当に慎重な調査が行われました。そしておよそ3万年前と確定されたのですが、高森町ではこの時代、人々の生活の跡は見つかっていません。これからの調査で出てくるかもしれませんが、伊那谷のあけぼのはおよそ3万年前といわれています。

高森の最古といわれるものはどの位前かということですが、最初に展示してありますのが増野川子石遺跡、これがおよそ1万2千年位前ではないかといわれています。

縄文時代草創期、旧石器との橋渡しともいわれています。中央道の発掘調査で見つかったわけですが、旧石器時代から縄文時代草創期と言われる時代、高森町の代表の遺跡として増野の川子石遺跡を取り上げさせてもらいました。

ここから出てきました石器群を展示するなかで当時の人々がどのような生活をしてたのか、どんな狩りをしてた

のかそんなことがわかればよいのですが、矢尻とか<sup>せんとうき</sup>尖塔器とか<sup>ゆうぜつせんとうき</sup>有舌尖塔器といったものがしっかり出てきましたし、  
表裏<sup>ひょうりじょうもん</sup>縄文土器<sup>どき</sup>といいまして裏、表に縄文の模様があるもの、先が尖った一番古い土器、そんなものが出てきました。

この時代のものは、<sup>しょうざはら</sup>正木原遺跡とか<sup>ちはやばら</sup>千早原遺跡とか<sup>かないばら</sup>鐘鑄原遺跡などからも発見されています。今お話した様に高森町は縄文の宝庫といってもよいのかもかもしれません。

縄文時代の中期というのは縄文時代でも気候が暖かく、一番遺跡の数が多い時期でも有りますが、今回その代表的な遺跡として山吹の<sup>ましのしんきり</sup>増野新切遺跡の土器群を二階ホールのところへオープン展示をしました。間近で土器が見られる、触ってもらえる、そんなことができる展示を心がけたつもりです。

増野新切遺跡は中期の代表的な遺跡で78軒もの家が見つかりました。およそ4千年位前のものですが、一度に78軒ではなくて段階をおいて結果的に78軒となりました。およそ5つの時期に分けられるということがわかりましたので、その5つの時期の流れが分かる様に順番に展示しました。そのほかたくさんさんの遺跡があるわけですが縄文中茎の遺跡は町内全域から出ているといっても過言ではないかと思えます。

縄文土器を沢山並べれば時代の流れがわかるかなあとも思いましたが、代表的なものをということで中期では増野の新切遺跡、それから角田原遺跡、鐘鑄原遺跡、瑠璃寺前遺跡など、各時期の代表的なものを展示しました。増野新切から出てきた石器群も一緒に展示してあります。この当時どんな物を使っていたのかということがわかるかと思えます。

それから【**縄文人の美と祈り**】というコーナーを設けました

縄文の人達は自然と共に生活をしていたということで「生」と「死」というものはどうしようもなく神聖なものであったわけです。人々は豊かな生命の誕生を願って男性のシンボルに見立てた石棒ですとか、女性の妊娠した姿の土偶などを作りながら生命のお祭りをしたのだと思います。高森でも御射山原の遺跡や瑠璃寺前遺跡からも石棒が出ています。

また、増野新切遺跡からは沢山の土偶がみつかっています。そのうちの一部を展示してあります。この写真にあります下伊那教育会所有の土偶はその中でも高森の代表的な物で、ここの資料館には無いので「是非寄託をして欲しい」と下伊那教育会へ申し入れたのですが、教育会の財産ということでそれは叶いませんでした。一応三ヶ月という期間を区切ってお借りしてきました。増野新切遺跡D-1号から最初に見つかった土偶です。記念碑的な土偶になるのでなんと飾りたかったのですが、お借りできましたので見ていただきたいと思えます。それから家の中に敷石をしてお祭りをしたというような遺跡も瑠璃寺前遺跡の他に千早原遺跡、吉田の広庭遺跡、大島山の東部遺跡といったところで五ヶ所もみつかっています。敷石の家というのは北信、東信、関東の方には沢山あるのですが、飯田下伊那では高森だけです。

この当時、人々が死ぬと手厚く葬ってそれを骨にして祀葬墓というのがありますが、吉田の広庭の深山田遺跡とか大宿遺跡からは土器棺墓がみつかっています。50個位みつかっています、これも飯田下伊那では高森町だけです。そのうちの一部を合わせ口甕棺墓といって展示をしています。

それから縄文人が耳につけた耳飾があります。小さな物は五ミリ位、5センチ、6センチ、もっと大きなものになると9センチ位の物もあるようです。縄文人のピアスです。これが南大島川の沿岸にあります武陵地遺跡から500個以上出ています。この500個というのは大変な数でして、伊賀良の中村中平遺跡からは700個以上出ています。松本のエリ穴遺跡からはもっと沢山出ています。高森は県下3番目の数ですが、全国でも6番目位の数の多さです。他の遺跡からもぽつぽつとは出ているのですが、武陵地遺跡は大変な遺跡だなあと思えます。その一端を展示しましたが、高森町の特色のひとつだと思えました。

それから次の時代ですが稲作が入ってきて、ここ高森町もいよいよ弥生時代を迎えます。ここに展示してあります壺は山吹の新田遺跡から出てきたものですが、その最初の頃と考えてよいと思えます。炭素 C-14 という調査をやってもらいまして紀元前の595から400というのが66%の確立、それから紀元前780から480というのが87%の確立があるということで、大変高い確率で弥生時代前期のものであるということをお知らせしました。こういうものが見つかっているという事で弥生時代の文化がしっかりと根付いていたということがわかります。

西日本では弥生時代金属器が使われるようになりますが、この伊那谷ではまだまだ金属器を使えるような時代ではありませんでした。石器の文化です。弥生時代では特殊な文化だと思えますが石器が中心の文化でした。その代表的な遺跡が北原遺跡です。ここから出てきた北原式土器というのは弥生時代中期後半の標準、標識土器で、大変有名です。その一群を展示しました。また、ここで示させていただいたのは石器群です。農具、工具、武器といったものが北原遺跡の前面から出てきています。特に磨製石属、綺麗に磨かれた矢尻が作られていく過程がわかるようになっています。原石を割って磨いて形を作っていく、その過程がわかるようなものが出ていましたのでそんな形で展示をしました。

それから弥生時代の後期、いよいよ古墳時代の前になりますが、ここからは町内全域から弥生時代の文化の家が出て

います。展示をした物は中島式土器の文化になりますが月夜平遺跡・山吹の追分遺跡・出早神社附近の遺跡から大きな集落が出ています。吉田の井ノ上遺跡ですがここも調査の結果、沢山の弥生の家が見つかっています。そのようなものを代表して土器を展示しました。

弥生時代のお墓ですが方形周溝墓というのが高森町でも沢山みつかっています。出原西部、北原遺跡からもみつかっています。弥生時代が終って古墳時代に入ってからこのようなお墓が各地で造られていきます。そして古墳時代へとつながっていく。どんなふうにつながっていくかというのは興味あるところですがそれは後ほどお話しさせていただきます。

古墳時代に入りますが高森の代表的な古墳ということで若宮2号という古墳があります。明治時代に墓が開けられまして沢山の副葬品があるということがわかっていました。

この大甕は道路工事の時若宮2号古墳の周溝がみつき、その中からこの大きな甕の破片がみつかりました。それを復元しましたが6世紀末の大甕です。いったいどの位の水が入るのかを体積計算をしようと思いましたが、難しくできませんでした。

あとは馬具、石製の紡水車、糸を紡ぐ道具ですね、そんな物が出ています。それからここから出たといわれる銅鈴ですがこれは朝鮮系のものではないかとされています。

南大島川沿いの上洞2号墳とか3号墳からは轡ぎょうよう(くつわ)、杏葉ぎょうようという尻飾りそんなものが出ています。長野県の馬具を研究される松尾さんという方の論文の中に載ってまして、馬具で卒論を書こうとする学生さんも毎年何人が調査にみえます。それほど全国的にも認められている出土物です。そういう古墳を造った人達はどのようなところに住んでいたのかということですが、その代表として新井原遺跡の家から出た土器をセットとして展示しました。SB-1と書いてある1号住居地ですが、そこからは生活用品一式がでてきました。

中谷とか堂垣外、金部といった遺跡から古墳時代の家が見つかっています。中段では吉田のヨシガタ遺跡とか出原西部遺跡からも家の跡が見つかっていますが、下段に比べると少し薄いかと思います。いずれにしても古墳を造った人達の拠点的集落が下段にあったかなと思います。

それから奈良時代の高森の代表的なものということで下市田の古瀬遺跡から家が2軒みつかりました。そのうちの1軒から瓦がでてきました。瓦というのは屋根に葺く屋根材ですが、これは屋根ではなくてカマドの芯として使われていました。カマドの芯にこうしたものを使える人が住んでいたということはすごいことです。瓦は三河岡崎の方の系統ということで、座光寺にあります金井原という瓦を焼いた釜がありますが、ここから出たものといわれています。中谷、金部、堂垣外から奈良、平安時代の家が沢山出ているということは当然恒川遺跡との関係を考えていかなければいけない遺跡であるということです。

それから平安時代になりますと薄い、濃いにはありますが町全体から家が見つかっていますが、吉田から中段域は薄いような感じがします。これからみつかるともかもしれません。

この時代の陶器ということで緑釉陶器と灰釉陶器というのを取り上げています。緑釉というのは奈良の奈良三彩というのが一番有名ですが、そういう貴重なものを真似してつくったのが緑釉陶器というものです。一般の人々が持てるものではなかったということです。

灰釉陶器というものも真似をして猿投のほうで焼かれたものですが、やはり一般の人達は使えなかった。そういうものが出てきた遺跡が高森にあるわけです。緑釉陶器などが堂垣外や中谷でてきているというこの意味を考えますと、郡衙と繋げて考えていかなければと思います。

それから硯と文字のある土器ということで展示しました。硯が出たということはそういうものを必要とした人が住んでいたということになります。土器にも文字が書かれていたということで、一般的ではない特別な人々が住んでいたということが下市田にあったということです。そこをどう考えるのかということが今日のテーマにもつながることだと思います。三本足の硯(写真)など大変珍しい物です。

**【神坂峠を越えてきた大甕】**というふうになりましたが中谷遺跡からこんな大きな甕、高さ90センチ、幅80センチの大甕が出ています。これは猿投で焼かれた土器、中くらいの土器は多治見にあります美濃須衛窯で焼かれたものです。こういったものが馬の背にくくられて神坂峠を越えてきたのだと思います。この大甕の復元は昨年からの整理作業に入っている皆さんに御尽力いただいてここまで物に出来ました。こういうものが高森の地から出ているところを是非見ていただきたいと思います。

中世になりますと皆様後存知のとおり《松岡の時代》といってよいかなと思います。松岡城の調査で沢山の遺物が出てきました。一部は今までも展示していましたが、今回は中国製品とか瀬戸とか分類分けしまして分かりやすく展示しました。専門家に分析してもらったものを展示してあります。フルーツラインの調査のときに大下砦跡を発掘調査したのですが、その堀から常滑の大甕の破片がみつかりました。それも復元しました。

次に瑠璃寺の北側に上の平遺跡というのがありますが、ここからは12世紀から14世紀の火葬墓が見つかっています

す。50基ほどです。これだけたくさんの中世の火葬墓が見つかっているのは高森くらいで大変珍しいものです。そこから出てきました骨壺ですが、なかなかよい物がありましたので展示しました。一番古いものは渥美の窯で焼かれた12世紀のものであるということでこれも展示しました。上の平遺跡からは古銭とか鉄製品の鎌とかも出てきました。保存処理が出来ていけませんので今回は展示しませんでした。瑠璃寺との関係で高貴な方が住んでいたのではないかと思いますので、これから解き明かされていかなければならない物のひとつかと考えます。

次に古瀬遺跡ですが、奈良、平安時代の後、戦国時代の屋敷跡がいくつも出ています。そこからはこの時代に使われた生活用品が沢山出てきました。これも展示してあります。古瀬遺跡は松岡城の崖下ですので上の松岡城と古瀬の関係を解き明かす事は大きな課題であると思っています。最後になりますが中世じょうかんせきというものがここ高森には段丘上に15箇所並んでいますが、そこの調査も進んでいまして、原城、大下砦などの展示も随時していこうと思っておりますが、その分布図を掲げまして皆様にも見ていただこうと思っています。色々おはなしをいたしました、実際の展示を見ていただければと思います。

### 3 伊那郡衙前後の高森の様相

伊那郡衙前後の高森の様相ということで次のようにお話を進めていきたいと思います。

#### ○古墳時代の姿～伊那郡衙成立前後～

伊那郡衙成立前夜ということで古墳時代の伊那谷の姿ですが飯田古墳群の様相、高森の古墳の様相、そしてそれがどうであったのか。それからその飯田古墳群を支えた基盤である馬匹(ばひつ)生産、それと畿内政権との関わり、色々な論がありますが代表的ものをお話したいと思います。

そして伊那郡衙があった時代の高森の様子、最後に伊那谷を支えた古代の道ということでお話をします。

#### ・飯田古墳群の様相

お手元の地図を見ながらお聞きください。飯田古墳群は大きく5つに分けてあります。座光寺、上郷、松尾、竜丘、川路、と分かれています。飯田古墳群主要古墳変遷図(飯田古墳群 飯田市教育委員会2012)を見て下さい。

まず始めに方形墳ですが、低い墳丘を持った墳墓が5世紀まで連続とつながっていきます。この時代、飯田には大きな古墳は有りませんが、4世紀の前半に松尾の代田山に前方後方墳が造られます。代田山狐塚古墳です。この古墳は東海地方に起源があるといわれる東海系前方後方墳です。松本や長野にも有りますが、そこからつながって前方後円墳となっていく。そして此の頃ですが西の原の笛吹古墳2号墳というのが飯田のバイパスの工事で見つかりました。羽場の獅子塚も調査の結果前方後方墳ではないかといわれていまして3つの古墳がつながっていくということになります。そして5世紀の中頃からいきなり前方後円墳がポンポンと造られるようになります。

前方後円墳は飯田、下伊那で23基あります。座光寺、上郷、松尾の古墳群では馬の埋葬が28例見つかりました。全国でダントツです。5世紀の後半からは馬具の出土する古墳が出てきます。そして6世紀、横穴式石室というのがこの伊那谷に導入されます。色々な形の石室が飯田古墳群の中で作られていきます。

6世紀の終わり頃は開善寺の近くにあり馬背塚の前方後円墳の前方に石室があり、そこが最後の石室ということで、5世紀中頃から6世紀末にかけて飯田の古墳群も大きな流れの中で終わっていくということになります。

ではそれぞれの古墳について少し詳しく見ていきたいと思います。最初に高森と関係のある座光寺の古墳群についてみていきます。

#### ・<前期・中期の座光寺古墳群>

座光寺の古墳群は全部で77基あります。前方後円墳が2基、これは北本城古墳と高岡1号古墳です。それから帆立貝式古墳といって前方部が短くて帆立貝の形をしている新井原12号古墳、これもある意味、首長墓で前方後円墳を頂点とするならその次くらいです。そういう主要な古墳というのは南大島川に面した低位段丘上に集中分布して古墳群が造られていたというのが座光寺古墳です。新井原、高岡、石行、畔地といった古墳群を形成しながら作られてきました。

座光寺は前期の物は明確なものはありません。ただ、恒川遺跡、これはバイパスを調査した時ですが大きな円墳の周溝の跡が見つかりまして、これがかなり古いのではないかと、それから座光寺の上の方の尾根の先端に浅間塚古墳というのがありますが、これも結構古いといわれていますが確証はありません。また、弥生時代の方形周溝墓の系譜を引く小型低方墳も今のところ見つかりません。

中期5世紀になりますと新井原2号古墳、高岡4号古墳、新井原12号古墳等出てきて、特に新井原2号や高岡4号からは馬を埋葬した墓壙が出てきました。それから帆立貝式古墳の中からも馬の墓が見つかり、合わせて7頭分の馬が見つかりました。

#### ・<後期の座光寺古墳群>

後期になりますと横穴式石室につながるものが造られてきます。先ず北本城古墳ですが、座光寺小学校を建設する時に座光寺氏の城跡、北本城を調査しました。その時土塁の一部として使われていたことが確認されたのが北本城古墳です。そこで石室が見つかりました。6世紀の初頭です。そして次に畦地1号古墳円墳ですがここからは銀製長鎖式垂飾付耳飾が出ました。これは朝鮮系として大変有名な耳飾です。それから高岡1号古墳全長72.3mという大きな6世紀中頃の古墳です。この3つの古墳は石室の形が同じ系統です。一番下に縦に石を並べてその上に石を積んでいくというということで、その系譜を辿っていきますと朝鮮半島、伽耶の方にその出自があるといわれています。その後、少し時代が下がりますと石塚古墳等が造られてきます。この北本城、高岡、畦地は高森と関係が深いので覚えておいて下さい。これが高岡1号古墳(写真)と石室です。この縦に積んである石の積み方が特徴的だということです。そしてここからは埴輪も沢山出ています。

#### ・〈上郷古墳群の様相〉

次に上郷古墳群です。ここは古墳の総数は35基です。前方後円墳が3基 溝口の塚古墳、これは、153号線バイパス工事で調査をして消滅してしまいました。それと番神塚、飯沼天神塚。天神塚古墳は今も残っています。飯田松川に面した低位段丘上に5世紀から6世紀まで連続として古墳が造られていました。

溝口の塚古墳は竪穴式石室でした。人骨が見つかっています。40歳くらいの渡来系の男性といわれています。短甲、兜、鎧などが見つかっています。

宮垣根外遺跡からは6頭の馬の埋葬例がありました。これで座光寺に7頭、上郷に6頭、合わせて13頭です。飯沼天神塚古墳は石室の形が安中市の築瀬二子塚古墳と似ていることから何か関係があるのではないかとされています。それを支えた遺跡として高屋遺跡・丹保遺跡・矢崎遺跡があります。そういう遺跡が生産基盤となって上郷の古墳時代を支えていたということ。これは天神塚古墳です。(写真)これは石室ですが、石室の後ろから見た写真です。細長い羨道があり、大きな玄室がありました。先日の古墳群見学会でご覧になった方もあると思いますが特色のある石室です。

#### ・〈松尾古墳群の様相〉

ここは特色があります。古墳の総数は71基。前方後方墳が2基 代田山狐塚古墳、羽場獅子塚古墳です。それから前方後円墳が7基 帆立貝式が1基、前期は代田山狐塚 そこに小型の低方墳がずっと続いています。

そして5世紀になりますと物見塚古墳、ここからは馬の骨が出ています。バイパス工事で茶柄山古墳、松尾からは馬の埋葬例が15ありまして、7と6と15合わせて28例が飯田古墳群から見つかっている数になります。大変な数です。見ていただいた通り色々な形の古墳や石室があります。

最後がおかん塚古墳というもので6世紀の末に造られています。畿内系両袖式横穴式石室といわれていますが高さ3m 幅8mくらいの大きな石室です。

#### ・〈竜丘古墳群の様相〉

ここは古墳総数142基、飯田古墳群では最多の古墳群です。前方後円墳9基、帆立貝式3基、ここは南と北のグループがありまして北の方が少し小さいです。6世紀の末まで連続として古墳が築かれてきました。

前期の方は古いものでは蒜田(ひるだ)古墳というのがあります。弥生時代以来の方形周溝墓の系譜を引く方墳です。

そして中期になりまして権現堂1号、兼清塚、塚原、大変豊富な副葬品が出ていますが馬の埋葬事例は竜丘からは出ていません。しかしこれだけ大きな古墳群を造っているということはどういうことなのか。後期になりますと馬背塚古墳から石室が二つ出てきます。無袖式の物と畿内系両袖の物です。やはり畿内との強い関係性を持っているということ。それから古墳時代が終わった後、上川路廃寺というお寺が造営されたのではといわれていますが、瓦が沢山出てきました。

馬のお墓は無いけれども、これだけの大きな古墳群を作り畿内式の横穴石室が出来るこの地域ということは畿内と大変強いつながりがあったという証であるといえます。

馬生産をしていたのではなくて、馬生産を管理していた一族がいたのではないかと、取りまとめをして畿内のほうへ送っていたのではないかと、この古墳調査を纏められました飯田市の小林さんはそんなことを仰っていました。上郷考古の市澤さんはそういう中心地なので伊那郡衙ができる前、大宝律令の前は評と書いて「こおり」と読む、そんな時代があったがその時の役所があったのではないかと、言うておられます。ですからいずれにしろある中心地があったということは間違いないかと思えます。

#### ・〈川路古墳群の様相〉

前方後円墳は久保田1号というのが1基、天竜峡に月の木古墳群という円墳が5世紀に出来ていまして、ここからは馬具が出ています。ここからも馬生産に関わった一族が出ているかと思えます。川路の治水工事で調査された所に殿村遺跡というのがありますが、ここからは舟形の埴輪とか、家形の埴輪が出ていますので大変珍しいもので特色を付けられると考えます。ここは対岸の御猿堂古墳や馬背塚といった竜丘の古墳群と関係が深かったと考えます。

## 4 群衙成立前夜 古墳時代の高森町

群衛成立前夜の高森はどうであったかということを見ていきます。

生産の家の遺跡の中心は新井原遺跡・中谷遺跡・堂垣外遺跡という下段地域が中心地であったと思います。そしてこの分布を考えますと南大島川沿いの座光寺の対岸に古墳群が築かれています。それから上市田に一群が有り、下平で一昨年古墳が見つかりました。吉田地区には無いといわれています。あれだけ広いところになぜ無いのか。小川正業先生が調査をされて分布図の中には古墳のマークが二つ吉田についています。古城のあたりにひとつ、もう少し北の辺りに一つ付いているのですが、それが本当に古墳かどうかはわかりません。

高森の古墳というのは座光寺の古墳の隣ということもありまして、一連の物と考えて良いのではないかと小林さんは仰っています。南大島川は今行政で分かれています、あの流域は一体の物であるということです。ですから座光寺古墳群の馬生産に関わった人々の北限というのが高森を含めた座光寺地区といって良いと私も考えています。

古墳時代に中段・上段地域には大きな集落は見つかっていません。ヨシガタ遺跡とか出原西部遺跡で住居跡が見つかっています。

### ○ 高森の古墳の様相

高森では5世紀の後半から7世紀にかけて円墳が50基以上築造されています。一番古いのが近年、道路工事で見つかりました北原5号古墳です。ここには石室はありません。木棺を埋めて人を葬ったお墓ですね。ここが一番古いと位置付けて良いと思います。そして若宮・武陵地・北原の台地にも古墳が造られていきます。7世紀の北原4号古墳というのはL字型の石室がありまして、先程の座光寺の畦地1号古墳と形がそっくりであるという指摘がありました。ただ、時期的には1世紀以上離れているので直接的な関わりはどうかと思います。

こうした形は長野のほうの積石塚古墳からも出てきているということですが、いずれにしても渡来系の人達と関わり合いがあるといわれていますし、そこからは畿内系の土師器の杯が出ていましたのでやはりとても意味のある古墳だと思っています。

北林5号古墳ですが、下市田2区の会館を作ったときの工事で見つかりまして、ここからは2頭分の馬の歯が見つかりました。ですから7世紀には高森の地まで馬生産が広がってきていたと考えられます。

今、渡来系の人々の流入というおはなしをしましたが、高岡1号古墳・本城古墳・畦地1号は横の壁の積み方が殆んど同じだというのですが、縦に石を積んでその上に石室を積んでいくという同じ系統のもので渡来系のものではないかといわれています。

それから馬鈴が朝鮮系ということでこの高森の地にも渡来系の人達の影響があったと考える事ができます。座光寺古墳群の一部と考えても良いという根拠のひとつになると思います。

### ・座光寺と高森の古墳の比較 (図)

5世紀の後半から座光寺は古墳が造られ始めます。そして北原5号古墳が高森でも造られます。

6世紀になると本格的な築造が座光寺で始まり、それを受けて隣の高森でもこれだけの馬具・武具を伴う古墳が造られます。当然関係が無いということはないわけです。そして7世紀になりますと高森町の2つの古墳とつながっていきます。

ここまで飯田古墳群をみてきましたが、馬生産と飯田古墳群というのはどうしても切り離せないということになりますが、それについて色々な説がありますのでその辺を少しおはなしいたします。

### ○ 馬匹生産と畿内のつながり

飯田古墳群は古墳時代後半期から馬の埋葬例が28例、全国的に突出しています。馬自体は4世紀に大陸から伝わってきました。最初は大阪四条畷市の近郊で飼育が始まったと聞いています。

長野や甲府で馬の歯が出ていますが、これは本格的な飼育ではありません。畿内中央政権の馬の需要が増加という現象があったようです。それがこちらへ拡大してきたと考えられます。こちらへ拡大してきたのは伊那谷の田切地形が馬の生産に適応していたというのが一番の原因かと思います。その裏にある原因というのがいくつかあるようです。まず、軍馬の需要です。

この時期朝鮮半島では高句麗が南下してきます。そうすると日本と関係のあった百済などが危機となり軍馬を必要とする畿内政権の姿が浮かんできます。

岡安さんという研究者は「東国舍人騎兵」というものを組織したのではないかと考えました。そして馬具がこれだけ集中しているこの飯田地方に拠点があったのではないかと考えられます。

それからもうひとついわれているのが、馬を軍馬と考えるのではなくて輸送手段としての馬、この需要が高まったのではという考え方です。

高森も含めて飯田下伊那の馬具を研究された松尾さんは「戦闘用の馬利用はもちろんのこと、輸送、連絡、交通に果たした馬の役割を重視すべきである。」また、それまでの文化の流入ルート、流れの変化ということを考えておられまして「物の流入経路が5世紀半ばを境に海の路：古東海道ルートから山の路：古東山ルートへと移行した可能性がある。」と指摘をされています。

この元になっている現象がありますが、群馬県や北関東へは利根川とか荒川の水系を利用して東京湾から文化の流れがいったということ。ですから海上のルートというのが一番大きな交通手段であったということ、そこからそれぞれの河川に文化が繋がっていったという考え方です。

山梨県では富士川の流域に太平洋から富士川を伝わっていった文化があります。5世紀の半ば頃まではそれが主でした。その地には5世紀の半ば、前方後円墳が沢山造られています。ところが5世紀後半になると前方後円墳が無くなってしまいます。造られなくなるんです。そういうものが交通手段、伝播ルートの変化ではないかということです。

この長野県に目を移しますと稲作を基盤とした大変力のある善光寺平の首長たちが森將軍塚とか色々な將軍塚を造りまして、善光寺平を取り巻く台地上に前方後円墳を造り続けながら5世紀の半ばまでできます。ところが5世紀の半ばを過ぎますと、ピタッと前方後円墳が造られなくなります。そしてそれを境にこの南信地方で前方後円墳が造られ始めます。その5世紀中頃が大きな画期であると研究者の皆さんは言っています。

その原因は何なのかというのがやはり馬です。文化伝播ルートの違い、それは馬の需要の変化、交通手段としての馬が見直されてくることによってそんな変化が出てきます。稲作を基盤とした大きな力のあった善光寺平、最初は畿内政権としっかり結びついて地方経営の基盤となったのですが、馬を介してこの伊那谷が畿内政権と強い繋がりを持って地方運営の拠点になっていった、そのように考えられるのではないのでしょうか。

南信重視政策、馬匹生産、こんなことがいわれるのではないかと私も思います。

### ○ 馬匹生産と畿内とのつながり

畿内から関東で馬の埋葬例というのは飯田古墳群だけです。他にはありません。馬匹生産に関わる人と馬、その供給地、そういったものが陸上交通の拠点であったといわれています。そのように考えてきますと畿内政権の地方運営が地方を治めることによって、歴史の教科書にあったかと思いますが、九州の方で磐井の乱というのがありましたが、ああいうのも畿内政権が地方を運営していく中での葛藤の一つだと思いますが、強いことばかり言っているのはうまくいかない、上手にやりながら大和政権、朝廷を作っていくわけですが、そうした時に6世紀前半の横穴式石室、先程の飯田古墳群の中の石室には色々な形があるというおはなしをしました。

畿内政権の一方的な要求の中で造られてきたのではなくて、飯田古墳群の首長たちは横の繋がりを結構持っていたのではということがいわれています。先程の群馬の築瀬二子塚古墳と上郷の天神塚古墳との繋がりでずとか横のつながりがあったといわれています。そして最後が松尾のおかん塚、竜丘に塚越という古墳、馬背塚という古墳、この三つが畿内型の両袖式というものを造ってきたということは、これに対しては畿内がしっかりと管理をして造ってということ。円墳に造られるのは無袖式の石室ですが、無袖式という石室は畿内政権が押し付けてきたものではなく、地域の衆が工夫をしながら作り上げた石室、ですから上位層にはきちんとした経営を促し、その下の層については緩やかな政策を執っていた、二層構造ではなかったかともいわれています。

そうした事の表れが上久堅の方にも小さな古墳が出来ていますし、こちらの高森のことを考えますと上市田に古墳が出来たり、下平にも出来たりということで下の方は緩やかに広がっていて、下の層が古墳を造れるようになってきたその表れではないかといわれています。

いずれにしても畿内型両袖式横穴式石室のある竜丘・松尾古墳の盟主という者が最終的には馬生産に関わる権利を集約して中央政権と直接的にやり取りをしていたグループであろう、そして上郷とか座光寺の首長達はそこから受けて生産活動を直接やっていた立場になるかもしれません。

竜丘の人達が馬生産を管理し、三穂を通過して駒場、神坂峠を通過して中央まで送って行った。三穂にも古墳群がありますがそこからは沢山の甲冑が見つかっています。そういう意味でもルート上といわれ、集積地ともいわれています。6世紀以降馬生産の拡大が座光寺の北の方でどんどん広がっていきました。北林5号古墳では2頭の馬の骨が出ていますし、上市田の古墳群もそうです。近辺に馬を生産した人達が居たということが伺われます。

### ○ 飯田古墳群の終焉と伊那郡衙

5世紀後半～6世紀前半ですが、座光寺・上郷・松尾・竜丘・川路5地区の有力氏族が前方後円墳を造りました。

馬の生産・陸上交通を基盤として畿内政権との強いつながりを築いていきました。6世紀後半、竜丘・松尾地区の有力氏族が畿内式両袖式横穴式石室を造ります。これは、直轄の馬匹生産を集約した権限を持った地域ということです。そして畿内政権の支配が強化されます。そして、6世紀後半から6世紀末馬匹生産が座光寺地区北方へどんどん拡大してきます。竜丘の有力氏族が馬匹生産を管理していきました。そして馬背塚古墳の築造をもって古墳時代の終焉、次は寺院の時代となっていきます。

7世紀、竜丘地区では上川路廃寺というのを造ります。他の地区でも寺院の存在というのは予想されています。瓦が出たりしています。そして中央政権では大化の薄葬令というものを出します。これ以上古墳は造るなということです。ですからこういうことによって飯田、下伊那地区の前方後円墳も無くなっていきますので、まさに中央政権と機を一にして動いているのが飯田、下伊那の古墳、それを支えた人達です。いち早い脱却という言葉を使いました。大化の薄葬令が出たにもかかわらず大きな終末期古墳・群集積のある古墳というのが東日本にはありますが、ここ飯田、下伊那で

はそういうものは有りませんでした。それが次の郡衙の成立につながっていきます。

7世紀末 伊那郡衙の成立ということですが、これだけ馬匹生産を管理していた竜丘地区ではなくて何故座光寺なのかということですが、これには色々な理由があると予想されています。

畿内政権にしてみれば飯田古墳群の北限は座光寺である、ここまでは畿内政権の力は間違いなく届くということ。

この時代、馬生産は飯田以北の方へどんどん拡大していく、そちらの方の管理をどうするかといった時に出来るだけ北にあったほうが良い、しかし、北に行き過ぎてしまうと交通の要所である神坂峠の管理をどうするのかということ。

峠を降りた阿智の駅、育良の駅、その辺の管理もこのあたりの首長がやっていたいかなくはならないので、できるだけこちらに置きたい、しかし、北も大事だ。そう考えた時に畿内政権の力が及ぶ飯田古墳群の北端の地であった座光寺が郡衙の場所選ばれたのではないかと考えられるということです。

上郷考古博の市澤さんは最初に評(ひょう)と呼ばれた時代は竜丘の地に役所があったかも知れないと。それが次の時代になってくると遺跡の数がうんと減ってしまうのでこの違いで評(ひょう)の時代は上川路、郡衙の時代は座光寺ということがあったかもしれないと先日お話をされていました。そんな話を聞く中でそういうことなのかなあと私も思っています。

## ○ ヤマト王権と政治制度・氏姓制度

今まで古墳時代を支えてきたヤマト王権の政治制度と律令体制の政治についてどうなのかということですが、「氏(うじ)」というのは血縁でつながった一族、組織、そして「姓(かばね)」というのは職務に対する称号だということです。中央の方では臣、とか、連(むらじ)という姓(かばね)を受けた人達が畿内政権の中核を担っていきます。そしてその下に伴造(とものみやつこ)、職務を行使する伴、ですとかそれをさせる部(べ)という集団を率いて仕事をしているということ。渡来人たちもその中に組み込まれていったということもあります。では地方はどうかといいますと国造(くにのみやつこ)というものが治めてきた。大きな古墳を造っていた首長層というのはある種、国造と違ってよいかと思えます。そして国造たちは自分の子弟たちを舍人(とねり)として中央政権へ出仕させることがあったということです。

## ○ 律令時代のしくみ

畿内政権は五畿七道という制度を持っています。そして信濃の国は東山道のひとつの国として認められます。先程来おはなししてきました大宝律令以前というのは一番先に国が有り、その後郡(こおり)が有りそして郷がある。その郡(こおり)というのも評という字を書いたのが大宝律令以前です。最初に信濃の国とか伊那郡(いなこおり)というのが出てくるのが、そういう木簡がありますがそこには評という字が使われていますので大宝律令以前は評を使っていた。大宝律令が制定された以降は郡という字と使っています。国、郡、郷最後に里というのがもうけられて里長という言い方も出てきます。そして国は国府です。ここには国司を遣わせます。これは中央の役人です。そして郡衙には地方から採択して地方役人が充てられた。地方採用の終身官です。多くは国造から任命されていたようです。そして大郡、上郡等それぞれの数に応じた役人が配置されたようです。

## ○ 伊那郡とは

伊那郡衙の配置図が調査の上でわかってきましたのでまた見て置いて下さい。残念ながら伊那郡衙では郡庁(政庁)の跡はまだ見つかっておりません。租税を納める倉庫群、正倉院といいますがそういうものが見つかっています。厩も見つかっています。しかし、この時代の歴史を解き明かすうえで大変重要であるということで、国の史蹟に指定されたのが恒川遺跡です。

## ○ 律令時代の信濃の様子

信濃が文字として初めて出てくるのが「科野国伊那評鹿大贅」という木簡です。鹿の肉を中央へ送ったということで木簡として残っています。

## ○ 伊那郡大領金刺舍人八麻呂

伊那郡というのは四つの郷からなっていました。伴野郷・小村郷・麻績郷・福智郷です。高森は座光寺の麻績郷に入るわけです。そして伊那郡大領金刺舍人八麻呂という人ですが文献に出てくるのが天平神護元年、「藤原仲麻呂の乱の活躍での論功行賞せ正六位上の八麻呂外従五位下・勳6等を授けられる」という表現で出てくるのがひとつ、『類聚三代格』に「信濃国牧主当伊那郡大領外従五位下勳六等金刺戸舍人八麿解」ということで引用されています。この当時伊那郡の大領(長官)として勤務していたのが金刺舍人八麿であるということです。

### ・金刺舍人八麿とは

金刺舍人(かなさしのとねり)これは氏(うじ)ですが、どういう人だったのかということですが、一応纏めてみました。

金刺舍人氏は信濃の官号舍人氏族という言い方をされ、科野国造氏の一支族であるといわれています。この金刺は欽明天皇磯城島金刺宮(しきしまのかなさしのみや)に仕えたということでその宮の名前をとって金刺というのが使われ、金刺舍人氏を名乗ったということです。その一族についても欽明天皇磯城島金刺宮の出仕をして「トモ」(従者)として

仕えた者を金刺舎人と名乗り、子弟を送り出した科野の国造のトモである子弟の生活費を賄うために科野国領域内の一定の人々を統率して金刺舎人部（かなさしのとねりべ）と名付たそうです。そこから必要な品物を調達した。その結果、子弟を出した一族が金刺舎人直（かなさしのとねりのあたい）トモとして王宮に出仕した子弟が金刺舎人、その生活費を賄う為に設定した農民集団の管理者が金刺舎人部直（かなさしのとなりべのあたい）というように違った氏を持っていたそうです。そんな一族がこの伊那の長官として治めていたということです。

## ○ 伊那郡衙のあったころの高森

郡衙が機能していたのは7世紀末から11世紀です。この頃奈良・平安時代の遺跡の分布をみますとやはり下段に多く分布しています。新井原遺跡・中谷遺跡・堂垣外遺跡・金部・古瀬・道寿・北原 ことから辺に特に奈良時代の遺物が出ています。平安時代になりますと同じように下段は濃い分布がありますが、中段は薄くなります。広庭・深山田遺跡ここからも灰釉陶器のセットが出ています。上段になりますと瑠璃寺との関連で結構分布をしているのかなあとと思いますが、灰釉陶器片が沢山見つかっています。その中の代表的なものをいくつか見ていきたいと思えます。

### ・新井原遺跡の様子

カマドを持つ5世紀後半の住居跡が見つかりました。5世紀後半のカマドというのは導入されてからすぐだと思えます。ですから割と早い時期にこの高森の地でもカマドが作られてきたということ。ここからは須恵器などが出まして、6件の住居跡がありました。それから古墳時代～奈良・平安時代の住居跡・掘立柱建物が分布しています。

### ・中谷遺跡

新井原の近くにありまして。ここからは硯、「上」と書いた刻書の土器、緑釉陶器が沢山出ています。美濃須衛窯で焼かれた甕・猿投窯で焼かれた大甕、がひとつの穴の中から出てきました。

### ・堂垣外・金部遺跡の様子

ここも弥生時代から平安時代の大遺跡です。堂垣外Ⅰ パースという商業施設を掘った時には弥生時代中期後半の住居跡が6軒、方形周溝墓3基、古墳時代後期住居跡2、奈良時代掘立柱建物跡4、平安時代堅穴住居跡12、溝等大変な遺跡が出てきました。

堂垣根外Ⅱ（あさぎ線）では石の列を伴う平安時代の大型住居跡、堂垣外Ⅳ（下市田駅前）は奈良平安時代の大型住居跡が出てきました。

ここからは刻書墨書、硯、こういうものを必要とする人が居たということです。

### ・古瀬・道寿遺跡の様子

松岡城址の下辺りの遺跡です。土地改良事業で奈良平安時代の住居跡が2軒、平安時代の住居跡が4軒、中世～江戸期礎礎死建物跡や石列。区民会館の調査では古墳時代の堅穴住居跡や平安時代の堅穴建物址、それから町道の調査でも中世の住居址など沢山の物が出てきています。

### ・古瀬遺跡S B 2カマド出土の瓦

飯田市の金井原瓦窯で焼かれた物ですがこういうものを使ってカマドを作るといのはどういう人達なんですか。ここからは硯も出ています。

### ・7世紀の古墳（北原4号古墳）

道路建設工事で発見されました。石室の構造が座光寺の高岡1号、北本城、畦地と同じ朝鮮半島を起源とするものであった、それから畿内系の器が出ていること。こういう古墳に葬られた人は当然それにかかわった人達といえます。

### ・7世紀の古墳（北林5号古墳）

ここからは馬の歯が2頭分出ています。下伊那で見つかった馬では最後のものになります。

### ・富本銭出土の意味

武陵地1号古墳からは富本銭が出ました。7世紀の追葬時に埋葬されたと考えていますが、この富本銭は恒川遺跡でも出ています。富本銭は藤原京造営の為に経済活動に使われたといわれています。ですから流通範囲というのは限られるわけですね。それがここに有るといことはそれに関わった人が居たということです。畿内中央政権との強い繋がりがここ下市田にあったということです。

## ○ 高森は座光寺と一体の地域

こうして考えてきますと高森は座光寺と一体の地域であるといえるのではないのでしょうか。座光寺の伊那郡衙の成立前夜、これは飯田古墳群の北端と座光寺古墳群の一体化したものであった、渡来系文化の存在もある、そして馬匹生産の拡大により、座光寺の首長の基、直接生産活動に携わっていた集団がこの高森にあるということ、これは古墳の有り方等々でいえることです。律令期は座光寺と一緒に麻績郡に属します。それから伊那郡衙の時代は座光寺の金井原の瓦窯で焼いた瓦を使った家の有る古瀬遺跡、新井原・中谷・堂垣外・金部の遺跡から出てきている奈良・平安の遺構を考えますと当然郡衙との関わりを考えていかなくてははいけません。さらに富本銭の出土、郡衙に携わっていた役人、そういう人達が高森に住んでいたということがいえると思えます。

## ○ 伊那郡衙の終焉

座光寺・高森は「郡戸庄（ごうどのしょう）」に含まれていきます。『吾妻鏡』文治2年（1186）3月12日の条に後白河法皇が源頼朝に対し、支配下にある下総・信濃・越後3か国の年貢未納の荘園へ催促をしたという記録があります。

年貢未納の荘園として「信濃国 尊勝寺領 伊賀良庄 上西門院領 伴野庄 殿下 郡戸庄・・・」とあります。「郡戸庄」は、郡衙の有る地域を示すと考えられていて、伊那郡衙のあった一帯を指しているということでこの近辺ということです。所有者の「殿下」というのは当時の摂関家の当主藤原基通であったといわれています。そして1134年頃には郡衙は廃絶して、荘園のほうに組み込まれていったということです。そのように考えてきますと座光寺と高森は一体のものであるとって良いと思います。

## ○ 神坂峠と古代の道

「上川路廃寺と伊那郡衙考」という市澤英利さんの書かれた論文の中の図を引用します。市澤さんはこれを使って古代の街道について触れられています。そのことについて少しおはなしをします。

伊那郡衙と密接な関係のあった神坂峠です。神坂峠越えて色々な文化がこちらに入ってきて、又、色々な文化がこちらから出て行った、それを支えていたのが神坂峠ということです。

古墳時代は馬を中央政権へ運んだ道であったと、そして今まで見てきたとおり飯田古墳群というのは馬匹生産で支えられた一族の墓であった、と考えたときに古墳群の密集する地帯を通って行ったということは当然のことです。

馬匹を集約して神坂峠を越えて行ったということ。この時代は竜丘の盟主が集約をして三穂の伊豆木を通して駒場を越え、神坂峠から畿内へ送ったと考えられています。三穂の遺跡から五世紀の甲冑が沢山出ていますので当然ルート上であり、集積地でもあったともいわれています。

ところが律令下での幹線道路整備となってきた時に厩を何所に設置するかと考えていきますと、皆さんご承知のとおり幹線は直線に作られたものが多いということで、実際作られた道も直線のものが多いわけですが、そうした時に竜丘⇒伊豆木⇒駒場⇒神坂峠と行った時にはあまりにも起伏が大きすぎるのではないかと市澤さんは指摘しています。

ですから直線的に作るということになりますと、駒場から三穂に抜ける道ではなくて、駒場から中村の方へ直線的に延びたのではないかと、そしてそこから新川沿いの道が有るということで、竜丘の鈴岡公園の少し下に安宅遺跡という所がありますが、ここからは緑釉陶器とか硯とか掘立柱の建物跡が見つかり、豪族の住居跡ではないかといわれています。そしてそこが育良の駅ではなかったかと市澤さんは言っています。そこを通りますと三穂を越えて来るのに比べて起伏が全く違うということです。そして松尾を通り、松川を越えて上郷を越え、座光寺へ入り、高森へと北の方へ下がって行ったと考えられます。古東山道から令制東山道へと考えた時、そんなルートが考えられると市澤さんはいっています。そうしてみますと阿智の駅が有り、次の育良の駅というのは竜丘の安宅遺跡、そして松川の下段から上郷、座光寺へと考えられます。東山道については明らかになっていないのですが、他の研究者の方で市澤さんとはルートが違い、鼎寄りから竜丘の安宅遺跡へ降りるルートを考えられた方もいましたので、この頃そんな事がいわれ始めていると聞いています。

## 5 おわりに

こうしてみてもまいりましたが、高森の地は郡衙の有った座光寺と一体の地であったということです。

### 《高森は伊那郡の中心地であった》ということ。

最後になりますが高森の地の埋蔵文化財を考えたときにまだまだ課題があります。こうして資料館に勤めさせていただいている間に少しでも整理をして公開をしていきたいと思いますが、幸いなことに昨年度の途中から土器を整理する方2人が展示土器の復元をしてくれました。またこの4月からはさらに3名の方が加わり、5名で土器の整理作業を進めてくれています。ありがたいことです。そういう方々と一緒に微力ではありますが頑張っていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。